昭和文學全集

志賀直哉集

昭和二十八年二月五日　初版印刷
昭和二十八年二月十日　初版發行

昭和文學全集 7
志賀直哉集

著作者　志賀直哉
發行者　角川源義
印刷者　小田茂作
東京都品川區大井寺下町

發行所　東京都千代田區富士見町二ノ七
角川書店
振替東京一九五二〇八
電話九段一〇九四・八七〇八

本文紙　本州製紙株式會社
クロース　日本クロース工業株式會社
整版所　凸版印刷株式會社
印刷所　東日本印刷株式會社
製本所　自誠堂製本所

Printed in Japan

志賀直哉集

昭和文學全集

角川書店版

目次

巻頭寫眞　七
筆蹟　七
暗夜行路　九三
前篇　一九一
後篇　二〇〇
矢島柳堂　二〇四
痴情　二一〇
晩秋　二一四
山形　二一七
プラトニック・ラヴ　二二一
鳥取　二二七
萬暦赤繪　二三三
朝晝晩　二三五
日曜日　二三七
池の縁　二三九
鷗風　二四五
菰野　二六一
邦子　二六六
豐年蟲　二七〇
雪の遠足　二八四
早春の旅　二九六
淋しき生涯
灰色の月

PDF 需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

蝕まれた友情　二九八
兎　三一六
玄人素人　三一八
老夫婦（戯曲）　三二〇
奇人脱哉　三二七
秋風（戯曲）　三三二
山鳩　三三八
昨夜の夢　三三九
妙な夢　三四〇
末つ兒　三四二
朝の試寫會　三四五
自轉車　三五〇

隨筆

リズム　三五五
青臭帖　三五六
杏掛にて　三六二
内村鑑三先生の憶ひ出　三六六
泉鏡花の憶ひ出　三七三
マチス展を觀る　三七五
閑人妄語　三七六
續創作餘談　三七九
解說　三八八
年譜　三九三

志賀直哉集

孤杨自生枝

王武

暗夜行路（前篇）

序詞

私が自分に祖父のある事を知つたのは、私の母が産後の病氣で死に、その後二月程經つて、不意に祖父が私の前に現はれて來た、その時であつた。私の六歳の時であつた。

或る夕方、私は一人、門の前で遊んでゐると、見知らぬ老人が其處へ來て立つた。眼の落ち窪んだ猫脊の何となく見すぼらしい老人だつた。私は何といふ事なくそれに反感を持つた。

老人は笑顏を作つて何か私に話しかけようとした。然し私は一種の惡意から、それをはぐらかして下を向いて了つた。釣上つた口元、それを圍んだ深い皺、變に下品な印象を受けた。「早く行け」私は腹でさう思ひながら、尙意固地に下を向いてゐた。

然し老人は中々その場を立去らうとはしなかつた。私は妙に居堪らない氣持になつて來た。私は不意に立上つて門内へ駈け込んだ。其時、

「オイ〳〵お前は謙作かネ」と老人が背後から云つた。

私はその言葉で突きのめされたやうに感じた。そして立止つた。振返つた私は心では用心してゐたが、首はいつか音なしく點頭いて了つた。

「お父さんは在宅かネ？」と老人が訊いた。

私は首を振つた。然し此うは手な物言ひが變に私を壓迫した。

老人は近寄つて來て、私の頭へ手をやり、

「大きくなつた」と云つた。

此老人が何者であるか、私には解らなかつた。然し或る不思議な本能で、それが近い肉親である事を既に感じてゐた。私は息苦しくなつて來た。

老人は其儘歸つて行つた。

二三日すると其老人は又やつて來た。其時私は初めてそれを祖父として父から紹介された。

更に十日程すると、何故か私だけが其祖父の家に引きとられる事になつた。そして私は根岸のお行の松に近い或る横町の奥の小さい古家に引きとられて行つた。

其處には祖父の他にお榮といふ二十三四の女が居た。

私の周圍の空氣は全く今までとは變つて居た。總てが貧乏臭く下品だつた。

他の同胞が皆自家に殘つて居るのに、自分だけが此下品な祖父に引きとられた事は、子供ながらに面白くなかつた。然し不公平には幼兒から慣らされてゐた。今に始まつた事でないだけ、何故かを他人に訊く氣も私には起らなかつた。然しかういふ風にして、こんな事が、これからの生涯にも度々起るだらうと云ふ漠然とした豫感が、私の氣持を淋しくした。それにつけても私は二ケ月前に死んだ母を憶ひ、悲しい氣持になつた。

父は私に積極的につらく當る事はなかつたが、常に〳〵冷たかつた。が、この事には私は餘りに慣らされてゐた。それが私にとつて父子關係の經驗としての全體だつた。私は他の同胞の同じ經驗をそれに比較するさへ知らなかつた。それ故私はその事をさう悲しくは感じなかつた。

母は何方かと云へば私には邪慳だつた。私は事々に叱られた。實際私はきかん坊で我儘でもあつた。が、同じ事が他の同胞では叱られず、私の場合だけでは叱られるやうな事がよくあつた。然し、それにもかかはらず、私は心から母を慕ひ愛してゐた。

四つか五つか忘れた。兎に角、秋の夕方の事だつた。私は人々が夕餉の支度で忙しく働いてゐる隙に、しも手洗場の屋根へ懸け捨てあつた梯子から誰にも氣づかれずに一人、母屋の屋根へ登つて行つた事がある。棟傳ひに鬼瓦の處まで行つて馬乘りになると、變に快活な氣分になつて、私は大きな聲で唱歌を唄つて居た。私としてはこんな高い處へ登つ

たのは初めてだつた。普段下からばかり見上げてゐた柿の木が、今は足の下にある。
西の空が美しく夕映えてゐる。鳥が忙しく飛んでゐる……
間もなく私は、
「謙作。——謙作」と下で母の呼んでゐるのに氣がついた。それは氣味の悪い程優しい調子だつた。
「あのネ、其處にぢつとして居るのよ。動くのぢや、ありませんよ。今山本が行きますからネ。其處に音なしくして居るのよ」
母の眼は少し釣上つて見えた。甚く優しいだけ只事でない事が知れた。私は山本の來るまでに降りて了はうと思つた。そして馬乘りの儘少し後じさつた。
「ああつ！」母は恐怖から泣きさうな表情をした。「謙作は音なしいこと。お母さんの云ふ事をよくきくのネ」
私はぢつと眼を放さずにゐる、變に鋭い母の視線から縛られたやうになつて、身動きが出來なくなつた。
間もなく書生と車夫との手で私は用心深く下された。
案の定、私は母から烈しく打たれた。母は亢奮から泣き出した。
母に死なれてから此記憶は急に明瞭して來た。後年もこれを憶ふ度、いつも私は涙を誘はれた。何といつても母だけは本統に自分を愛して居てくれた、私はさう思ふ。
前後はわからない。が、其頃に違ひない。
私は一人茶の間で寢ころんで居た。其處に父が歸つて來た。父は默つて、袂から菓子の紙包を出し、茶簞笥の上に置いて出て行つた。私は寢た儘、じろ〳〵それを見てゐた。
父が又入つて來た。そして、今度は紙包を戸棚の奥へ仕舞ひ込んで、出て行つた。
私はむつとした。氣分が急に暗くなつた。
間もなく母が、父の脱ぎ捨てた外出着を持つて、次の間へ入つて來た。私には我儘な氣持が無闇と込み上げて來た。泣きたいやうな、怒りたいやうな氣持だつた。
「母さん、お菓子」
「何を云ふんです」母は言下に叱つた。その少し前に私は其日のおやつを貰つてゐたのだ。
「何か。よう、何か」
母は應じなかつた。そして、疊んだ着物を簞笥へ仕舞つて出て行かうとした。
私は起き上つて、
「よう、何か」かういつて、母の前へ立ちふさがつた。母は默つて私の頰をぐいとつねつた。私は怒つて其手をピシャリと打つた。
「もう食べたぢや、ありませんか。何です」
母は私をにらんだ。
私は露骨に父の持つて歸つた菓子をせびり出した。
「いけません。そんな……」
「いや！」私は權利をでも主張するやうに頑固に首を振つた。何しろ、私は氣持がクシャクシャしてかなはなかつた。其菓子がそれ程に食ひたいのではない。兎に角、思ひ切り泣くか、怒られるか、打たれるか、何かそんな事でもなければ、どうにも氣持が變へられなくなつて居た。
母は私の手を振り拂つて、出て行かうとした。私は後ろから不意に母の帶へ手をかけ、ぐいと力一杯に引いた。母はよろけて障子に摑まつた。其障子がはづれた。
母は本氣で怒り出した。そして、私の手首を摑み、ぐん〳〵戸棚の前へ引張つて行つた。母は片腕で私の頭を抱へて置いて、いやがる私の口へ其厚切りの羊羹を無理に押し込んだ。食ひしばつてゐる味噌齒の間から、羊羹が細い棒になつて入つて來るのを感じながら、私は度膽を抜かれて、泣く事も出來なかつた。
亢奮から、母は急に泣出した。少時して私も烈しく泣出した。
根岸の家では總てが自墮落だつた。祖父は朝起きると揚子をくはへて錢湯へ出かけた。そして歸ると其寢間着姿で朝餉の膳に向つた。
來る客も變つた色々な種類の人間が來た。殊に花合戰をする、その晩には妙な取合せの人々が集まつて來た。大學生、それから古道具屋、それから小說家（？）それから山上さ

んと皆が云つてゐる五十餘の一寸未亡人らしい女などであつた。此女は其頃の醫者が持つたやうな小さい黒革の手さげ鞄を持つて來た。それには、きまつて澤山な小錢と、一揃ひの新しい花札と太い金縁の眼鏡とが入つて居たさうである。然し此女は未亡人ではなく、其頃大學で歴史を教へて居た或る年寄つた教授の細君で、此女の甥が嘗てお榮と同棲して居た、その縁故で、良人に隱れて好きな遊び事の爲めに來たのだと云ふことである。其甥と云ふ男は大酒飲みで、葉卷のみで、そして骨まで浸み貫つた放蕩者で、たうとう其二三年前に殆ど明かな原因なしに自殺して了つたと云ふ事を私は二十年程してお榮から聞いた。

山上と云ふ女は十時頃には大概歸つて行つた。すると其頃になつて、東京者の癖に大阪辯ばかり使ふ若い寄席藝人がよく仲間へ入りに來た。

お榮は勝負には入らなかつたが、祖父の勝敗には多分實際上の氣持から、よく焦慮して口出しをして居た。さう云ふ時、いつも下品な皮肉を云つて皆を笑はせるのは其寄席藝人であつた。

後年私は、何故それ程、困りもしないのに祖父はあんな暮らし方をしたらうと、よく考へた。月々困らぬだけの金は父から來てゐたのである。それなのに、祖父はがらくた道具の賣り買ひをしたり、がらくた道具屋の競賣に家を貸して席料を取つたりした。まうけづく以上、祖父の趣味のやうにも思へた。

お榮は普段少しも美しい女ではなかつた。然し湯上りに濃い化粧などすると、私の眼にはそれが非常に美しく見えた。さう云ふ時、お榮は妙に浮きくとする事があつた。祖父と酒を飲むと、其頃の流行歌を小聲で唄つたりした。そして、醉ふと不意に私を膝へ抱き上げて、力のある太い腕で、ぎつと抱き締めたりする事があつた。私は苦しいままに、何かしら氣の遠くなるやうな快感を感じた。

私は祖父を仕舞ひまで好きになれなかつた。寧ろ嫌ひになつた。然しお榮は段々に好きになつて行つた。

根岸の家へ移つて半年餘り經つた或る日曜日か祭日かの事であつた。私は久しぶりで祖父に連れられて、本郷の父の家へ行つた。丁度兄は書生と目黒の方へ遠足に行つて、唉子と云ふ未だ一年にならぬ赤兒とそして父だけが家に居た。

祖父と一緒に父の居間に挨拶に行くと、其日父は珍らしく機嫌がよかつた。父はいつにない愛想らしい事を私に云つた。父としてはそれは氣まぐれだつた。何か其日氣分のいい事があつたのかも知れない。然しそんな事は私には解らなかつた。私は何かしら惹かれるやうな心持で、祖父が茶の間へ引きかへしてからも、一人其處に殘つてゐた。

「どうだ、謙作。一つ角力をとらうか」父は不意にこんな事を云ひ出した。私は恐らく顔一杯に嬉しさを現はして喜んだに違ひない。そして首肯いた。

「さあ、來い」父は坐つた儘、兩手を出して、かまへた。

私は飛び起き樣に、それへ向つて力一ぱい、ぶつかつて行つた。

「中々強いぞ」と父は輕くそれを突返しながら云つた。私は頭を下げ、足を小刻みに踏んで、又ぶつかつて行つた。

私はもう有頂天になつた。自身がどれ程強いかを父に見せてやる氣だつた。實際角力に勝ちたいと云ふより、私の氣持では自分の強さを父に感服させたい方だつた。私は突返される度に遮二無二ぶつかつて行つた。こんな事は父との關係では嘗てなかつた事だ。私は身體全體で嬉しがつた。そして、をどり上り、全身の力で立向かつた。然し父は中々私の爲めに負けては呉れなかつた。

「これなら、どうだ」かういつて父は力を入れて突返した。力一ぱいにぶつかつて行つた所にはずみを食つて、私は仰向け樣に引つくりかへつた。一寸息が止まる位背中を打つた。私は少しむきになつた。而して起きかへると、尙勢込んで立向かつたが、其時私の眼に映つた父は今までの父とは、もう變つて感じられた。

「勝負はついたよ」父は亢奮した妙な笑聲で

云つた。
「未だだ」と私は云つた。
「よし。それなら降參と云ふまでやるか」
「降參するものか」
間もなく私は父の膝の下に組敷かれて了つた。
「これでもか」父はおさへて居る手で私の身體をゆす振つた。私は默つて居た。
「よし。それならかうしてやる」父は私の帶を解いて、私の兩の手を後手に縛つて了つた。そしてその餘つた端で兩方の足首を縛合せて了つた。私は動けなくなつた。
「降參と云つたら解いてやる」
私は全く親みを失つた冷たい眼で父の顏を見た。父は不意の烈しい運動から青味を帶びた一種殺氣立つた顏つきをして居た。そして父は私を其儘にして机の方に向いて了つた。
私は急に父が憎らしくなつた。息を切つて、深い呼吸をしてゐる、父の幅廣い肩が見るからに憎々しかつた。其内、それを見つめてゐた視線の焦點がぼやけて來ると、私はたうとう我慢しきれなくなつて、不意に烈しく泣き出した。
父は驚いて振り向いた。
「何だ、泣かなくてもいい。解いて下さいと云へばいいぢやないか。馬鹿な奴だ」
解かれても、未だ私は、なき止める事が出來なかつた。
「そんな事で泣く奴があるか。もうよしく彼方へ行つて何かお菓子でも貰へ。さあ早く」かう云つて父は其處にころがつて居る私を立たせた。
私は餘りに明らさまな惡意を持つた事が羞かしくなつた。然し何處かに未だ父を信じない氣持が私には殘つて居た。
祖父と女中とが入つて來た。父は具合惡さうな笑ひをしながら、說明した。祖父は誰よりも殊更に聲高く笑ひ、そして私の頭を平手で輕く叩きながら「馬鹿だな」と云つた。

第一

一

時任謙作の阪口に對する段々に積もつて行つた不快も阪口の今度の小說で到頭結論に達したと思ふと、彼は腹立たしい中にも淸々しい氣持になつた。そして彼は其讀み終つた雜誌を枕元へ置くのも穢らはしいやうな心持で、夜着の裾の方へ拋つて、電氣を消した。三時近かつた。
彼は矢張り興奮して居た。頭も身體も芯は疲れてゐながら中々眠る事が出來なかつた。彼は頭を轉換さす爲めに何か氣樂な讀物を見ながら睡むくなるのを待たうと考へた。が、さう云ふ本は大概お榮の部屋へ持つて行つてあつた。彼は一寸拘泥したが、拘泥するだけ變だとも思ひ返して、再び電氣をつけて二階を降りて行つた。襖の外で、
「一寸本を貰ひに來ました」と聲をかけて、
「塚原卜傳は戸棚ですか」と云つた。
お榮は枕元の電燈をつけた。
「床の間か、茶簞笥の上ですよ。未だ起きてたの？」
「眠むれなくなつたんで、見ながら眠むるんです」
謙作は茶簞笥の上から小さい講談本を持つて、「明日」と云つて其の部屋を出た。
「御機嫌よう」かういつて、お榮は謙作が襖を締めるのを待つて電燈を消した。
謙作は其氣樂な講談本を讀みながら、朝露のやうな濕り氣を持つた雀の快活な啼聲を戸外に聽いた。
翌日はどんより曇つた靜かな秋の日だ。午過ぎて一時頃、彼はお榮の聲で眼を覺ました。
「龍岡さんと阪口さん」
彼は返事をしなかつた。返事をするのが物憂くもあつた。が、それよりも今日阪口に會ふと云ふ事が未だはつきりしない彼の頭では甚くこんぐらかつた問題であつた。
「あちらへお通ししてよ。直ぐ起きて下さいよ」かう云つて出て行くのを、
「阪口だけ斷つて下さい」と彼は云つた。
「何うして？」お榮は驚いたやうに振り返り、兩手を襖に掛けた儘、立つて居た。
「ぢやあ、よろしい。二人共通して置いて下

さい。直ぐ行きます」

謙作をそれ程に不愉快にした阪口の小説と云ふのは、或主人公が其家にゐる十五六の女中と關係して、その女に出來た赤兒を墮胎する事を書いたものであつた。謙作はそれを多分事實だと思つた。そして其事實も彼には不愉快だつたが、それをする主人公の氣持が如何にも不眞面目なのに腹を立てた。事實は不愉快でも、主人公の氣持に同情出來る場合は赦せるが、阪口の場合は書く動機、態度、總てが謙作には如何にも不眞面目に映つた。尙其上にそれに出て來る主人公の友達と云ふのはどうしても自分をモデルにして居るとしか彼には考へられなかつた。其友達に對する主人公の氣持が彼を怒らした。

主人公は其女が餘りに子供らしく無邪氣な爲めに誰からも疑はれないのを利用して、平氣で友達の前で其女をからかつたり、いぢめたりする事を書いて居た。お人よしで、何も氣がつかずにゐる友達がそれを切りに心で同情して居る。主人公は尙皮肉にそれを見拔きながら、多少苛々もして、其女を泣かす事などが書いてあつた。

謙作は其女中を實際嫌ひではなかつた。如何にも無邪氣で人がよささうな點を可愛く思つた事もある。然し阪口がこれと唯の關係で居さうもない事は大概察して居た。それが阪口の小說では何も知らぬ友達が心密かに其女を戀してゐるやうに書いてあつた。そして主人公は腹に、動ともすると起つて來る嘲笑を抑へ、それを冷やかに傍觀して居る事が書いてあつた。主人公が他人の心を隅から隅まで見拔いたやうな、しかも、それが如何にも得意らしい主人公の氣持が謙作をむか〳〵させた。

然しそれにしても何故今日訪ねて來たか。其雜誌が出てからもう一週間になる。其間何か自分から烈しい抗議の手紙でも來さうに思ひながら、中々來ない。其不安に却つて脅迫されて出て來たのではないかしら。それとももつと性の惡い僞惡者根性から、太々しい面構へを自分に見せるつもりで來たのかも知れないと謙作は疑つた。若しかしたら手つ取り早く、面と向かつて思ひ切り云つてやつてもいいと考へた。

謙作の考へは段々誇張されて行つた。彼は顏を洗ひながらこんな考へで興奮した。

茶の間で着物を着かへて居ると、座敷の方から二人のしてゐる話し聲が聽こえて來た。二人は如何にも呑氣な調子で話して居た。謙作は何だか自分だけが鯱張つて居るやうな變な氣がした。皆が平氣で居る中に一人怒つてゐる自分が狐につままれたやうに馬鹿氣ても見えた。そして彼は一人不愉快を感じた。

「昨晩はおそかつたつて？」彼が座敷へ入ると、龍岡が氣の毒したと云ふ氣持を現はして云つた。

「もう起きる頃だつたのだ」

阪口はお榮が出して置いた其日の新聞を見ながら何氣ない顏をして居た。謙作は阪口が今自分が想像してゐたやうな氣持で來たのではない事を知つた。例のだらしなさからずるずると龍岡に誘はれて來たに違ひなかつた。それでも彼は、

「君達は何處で會つたんだ」と念の爲めに龍岡に訊いて見た。

「僕が連れ出したのさ」と龍岡は答へた。そして「此奴の今度の小說を見たかい？」と龍岡は特に「此奴」と云ふ言葉で一面或る親みをも含んだ輕蔑の流し眼を阪口へ向けながら云つた。謙作は返事をしなかつた。

「いやな小說だ。それもいいが、中に出て來る氣の利かない友達は僕をモデルにして書いてあるのだ。昨日見てすつかり腹を立てて、今朝起きぬけに出掛けて、怒つてやつた所だ」

阪口は新聞から眼を放さず、にや〳〵笑つて居た。龍岡は一人云ひ續けた。

「大部分空想だと云ふが、怪しいものだ。阪口のやりさうな事だ」

阪口はこんなに云はれても別に不愉快な顏もしなかつた。彼の腹は解らなかつた。然し彼の行爲の上の趣味から云つて、こんなに云はれながら只にや〳〵してゐる事は確かに彼自身氣に入つて居るに違ひなかつた。さう云ふ所に優越を彼は示さうとして居る。又一つは龍岡が全然異ふ仕事をしてゐる所からも、その餘裕を持てるらしかつた。龍岡は其年工

科大學を出て發動機の研究の爲め近く佛蘭西へ行くつもりで居る。

「他人の氣持を見透したやうな書き振りが一番不愉快だと云つてやつたんだよ。たまには當る事もあるが、人間の氣持は直ぐ動いて居るから、次の瞬間にはもうそれは反省してゐるし、或る場合、同時に反對した二つの氣持を持つて居る事もある。所が阪口の書く物では主人公に都合のいい氣持だけが見られて、不都合な方には全で色盲なんだ」

「もう解つたよ。何遍繰返したつて同じ事だ」阪口も一寸不快な顏をした。

「今朝から散々油をしぼつて居るんだよ」龍岡は謙作の方を向いて多少神經的に笑つた。

「しつつこい奴だ」と阪口が獨語のやうに云つた。

「ええ？」龍岡もむつとして云つた。「この位の事を云はれて君に腹を立つ資格はないよ。腹を立つなら、もつと幾らでも云ふよ。君は一ト口かど惡者がつて居るが、惡者としてちつともなつてないぢやないか。書いたものでは相當惡者らしいが、要するに安つぽい僞惡者だ。——墮胎が何だい」龍岡はつつぱなすやうに云つた。彼は今まで快活らしくはしてゐたが、其實阪口のにやにやした態度に不愉快を感じてゐたらしかつた。そして、それを破裂さした。龍岡は小柄な阪口に較べては倍もあるやうな大男で、その上柔道が三段であつた。さう云ふ點からも阪口はすつかり壓迫されて了つた。

謙作は先刻から阪口に對する自分の態度を如何決めていいかわからないで居る內に龍岡がこんな風にやつて了つたので、その白けた一座をどうしていいか分らなかつた。其儘三人は默つて居た。

「船は決つたのかい？」少時して謙作が沈默を破つた。

「十一月十二日の船にした」

「支度はもう出來たのかい」

「別に大した支度もないからネ。——それはさうと、浮世繪を少し買つて行きたいと思ふんだが、何時か一緒に見に行つて貰へないかな。どうせさう高い物は買へないが、彼方で世話になる人の贈物にしようと思ふんだ」

「此方もよくは解らないが、何時でもいい。行かう。然し此頃は隨分高くなつたらしいよ。前の相場を知つて居ると買ふ氣がしないさうだ。若しかすると巴里で買ふ方が安い物があるかも知れないよ」

「そいつは困るな。何か別の物にするかな」

「榛原の千代紙でも持つて行つちや、どうだい。生じつかな浮世繪より子供のある家なんかは喜ぶだらう」

謙作は阪口の氣押されたやうな樣子を見ると氣の毒な氣もしたが、あの作中の友達が龍岡の云ふやうに龍岡をモデルにしたものとは思へなかつた。成程書かれた場面は大概自分の知らぬ場面であつた。けれども其性格は阪口の眼に映つた自分をモデルにして居るとしか思はれなかつた。實際阪口が龍岡にさう云ふかどうかは分らないが、「場面は成程君との場面を借りた。然し性格がまるで異ふぢやないか」こんなことを云ひさうな氣が謙作にはした。謙作はこれは阪口の猾いやり方だと思つた。若し自分が性格だけは僕をモデルにしたに違ひないと掛合つて行けば、それは同時に自身の性格を其作中の下らない人物のそれに近いものと認めることになる。寧ろ書かれた場面が實際自分との間にあつた事ならば却つて怒りいい。然し性格だけを自分に取つたらうとは云ひにくかつた。それ程に下らない人物に書いてゐる。龍岡が怒れば君をあんな性格の人間とは誰が思ふものかと云ひ、自分が怒れば、君はああ云ふ性格の人間と自分で思つて居るのだねと云ひ兼ねない。此處に阪口の變な得意がありさうに思ふと謙作は尙腹が立つた。今の謙作は阪口に對しては極端に邪推深くなつてゐた。前に彼を信じて居ただけに、それを裏切られた今は、事々にかう云ふ邪推が浮ぶのであつた。殊に愛子との事以來、それは甚だ面白くない傾向だと知りつつも、彼は妙に他人が信じられなくなつた。今も前夜からの阪口に對する氣持を考へて、龍岡が彼自身だけがモデルにされたやうに怒つて居るのを見てさへ或疑ひを持つのであつた。

龍岡には昔氣質がある。若しかしたら作中

の友達が同時に謙作をもモデルにして書かれてある事を承知の上で、故意と自身だけがモデルかのやうに云つて、阪口をやつつけたのではあるまいかと、謙作は思つた。龍岡はさうする事で一方阪口を懲し、他方で、二人の間を多少でも氣まづくなくして日本を去りたいと思つて居るのではあるまいか。それでなければ阪口をわざ〳〵連出して來て、自分の前でこれ程にやつつけることが普段の彼の氣質としては少し不自然に考へられた。龍岡には短氣な性質もあつた。然し自分だけの問題に第三者のゐる前であれ程に露骨に云ふ彼とも思へなかつた。謙作には其處に何か彼の昔氣質から出た思惑がありさうにも思はれた。

二

新開地のやうな泥濘路に下品な強い光がさして居る。兩側の家々からは鮮やかな、然し神經を疲らしてゐる者は、その爲め吐氣を催すかも知れない程、あくどい色の着物を着た女達が往來を通る男に叫びかけて居る。それは憐憫を乞ふやうにも、罵るやうにも聽きなされる叫聲であつた。

龍岡と謙作とはもうすつかり壓倒されて了つた。二人は竝んで往來の中程を眞直ぐに急ぎ足で歩いて居たが、それでも龍岡は小聲で、

「中々綺麗な女が居るネ」などと云つた。

其日三人が赤坂福吉町の謙作の家を出たのは四時頃だつた。氣不味い感情を脫け出せずにゐる阪口は直ぐ二人と別れたがつたが、龍岡は却々彼を離さうとしなかつた。龍岡には此儘別れて了ふのは如何にも寢覺が惡いらしかつた。彼は自身が餘りに云ひ過ぎた事を多少悔やもゐる風だつた。そして三人は龍岡の千代紙を買ふつきあひをして日本橋の方へ行つたのである。

木原店の或料理屋で食事をした。謙作は殆ど飲めない方だつたが、其處を出た時には他の二人は可成りに醉つてゐた。

龍岡が突然、これから吉原見物に行きたいと云ひ出した。西洋へ行く前に見た事のない吉原を一度見て行きたいと云ふのだ。

「謙作、いいだらう？　只見物だけだ」彼は氣兼ねをしながら謙作を顧みた。謙作も未ださう云ふ場所を知らなかつた。彼は不愛想に生返事をしたものの、心では可成り拘泥した。さう云ふ場所には決して足を踏入れまいと云ふ程の氣はなかつた。何方かと云へば多少の興味もあつた。それ故今龍岡にそれを云はれると冷淡を粧ひながら、妙にドキリとした。

――謙作と龍岡は電信柱の多い仲の町まで出て、其處で遲れた阪口の來るのを待つて居た。阪口は如何にも醉漢らしい樣子をしながら、格子とすれ〳〵に、時々何か女に串戲ロをききながら歩いて居た。

「オイ、早く來ないか」と龍岡が聲をかけた。「空模樣が少し變になつて來た」

阪口は聽えない振りをして矢張りぶら〳〵と歩いて居る。謙作は空を仰いで見た。黑い雲が建竝んだ大きな建物の上に重苦しく被ひかぶさつて居た。

「俺達はもう歸るよ。一緒に歸るのかい？それとも別れるかい？」と龍岡が云つた。阪口は何か愚圖々々云つて居た。そして三人は其儘其通りを大門の方へ歩いた。

ポツリ〳〵雨が落ちて來た。三人は可成り疲れて居た。結局其邊の茶屋で少し休んで行く事にした。筆太に色々な屋號を書いた行燈を出した同じやうな家が兩側に軒を竝べて居る。三人はいい加減に西綠と書いた、其一軒に入つた。

眉毛の薄い、瘦せた四十餘の女將が、寒むさうに兩袖を胸の上で疊み合せ、店先に立つて、雨の降出した往來を眺めて居たが、

「どうぞ」と云つて、未だニスの香の高い洋風の段々から彼等を表二階の座敷へ導いた。新築の白つぽい木地には白熱瓦斯のケバ〳〵しい強い光りが照り反して居た。そしてそれとは凡そ不調和に、文鼎とした、汚れ切つた横物の山水が淺い置床に掛けてあつた。ニスの香の高い洋風の段々と云ひ、此不調和な生生しい座敷の樣子と云ひ、芝居の仲の町とは大分趣の異つたものだと謙作は思つた。彼は多少落ちつかない氣持で、柱に背を寄せかけて、ジーンと音でもして居さうな疲れ切つた膝から下を立膝にし、抱へて居た。

女將と入れ代つて眼の細い體の大きな、象のやうな印象を與へる女中が茶道具を持つて入つて來た。

「小稻と云ふ人は居るかい」物馴れた調子で阪口が訊いた。

「さあ、もう晩うムんすから、有ればようムいますが、お馴染なんですか」

「いいえ」阪口は濟まして答へた。

人のよささうな女中はそれを眞に受けていいものか、どうかを迷ふらしかつた。そして、「一寸見て參りませう」と降りて行つた。

謙作も龍岡も何かしらぎごちない氣持に捉へられて居た。龍岡はそれを拂ひのけるやうに餉臺の上の烟草盆から紙卷へ火を移すと、勢よく立ち上つて、障子を開け、一人緣へ出て行つた。彼が、がたゝ云はして其處の硝子戸を開けると、同時に雨の音、泥濘を急ぐ足音などが聽えて來た。

「いい恰好をして駈けて行く」彼は通を見下ろしながら云つた。

女中が今云つた藝者の斷りと、代を云つて來た事とを云ひに來た。

間もなく、其藝者が入つて來た。藝者は若かつた。そして變に不愛想にして居る三人を見ると、取りつき端がないやうに一寸赤い顏をした。藝者は長い綺麗な襟足を見せて、靜かに高いお辭儀をした。謙作は美しい女だと思つた。そして、物馴ない自分達は仕方がないとしても、阪口までが何故いやに冷淡な顏をして居るのかしらと思つた。然し間もなく阪口は「何て云ふの？」とか「何家？」とか訊いた。登喜子と云ふ名であつた。

小鼻の開いた、元氣のいい、然し餘り上品でない、名まで男の兒のやうな豐と云ふ藝妓が入つて來た。

登喜子は豐と一緒に次の間へ下ると、豐が太鼓を張る間、三味線を箱から出して、調子を合せた。

登喜子は痩せた背の高い女であつた。坐つて居ても何となく棒立のやうな感じがした。動作にも曲線的な所が少なかつた。其癖妙に輕快な、矢張り女らしい感じがあつた。

豐の踊りが濟むと、阪口は、

「何か他の事をして遊ばう」と云つた。豐の踊りは如何にも下手だつたが、濟むのを待つて居たやうに直ぐこんな風に云はれたら流石に不愉快を感じるだらうと謙作は氣の毒に思つた。所が、豐は却つてそれを喜んだ。そして、直ぐ下へトランプを取りに行つた。

十一時過ぎて居た。謙作は硝子戸越しに戸外を眺めながら、

「どうするネ？」と云つた。

「さうだなあ」と龍岡も生返事をして一緒に戸外を眺めた。雨はひつきりなしの本降りになつて了つた。もう人通りも前程ではなかつた。一臺の自動車が雨の絲を其強い光りで銀色に照らしながら通り過ぎた。

有耶無耶に尻を落ちつける事になつて、皆はトランプの二十一をした。

「どうかすると、石本の細君にそつくりだ」謙作は札を撒きながら、隣りの龍岡を顧みた。

「さう」龍岡は今更らしく登喜子の顏を見た。

豐と何か話して居た登喜子は自分の事を云はれたと氣附くと、負ん氣らしい眼を謙作に向けて、

「こちらは私の昔の岡惚れにそりやよく似ていらつしやるわ」と云ひ返した。

謙作は一寸まごついて矢が次げなかつた。そして一寸沈默が來かけると、登喜子は又輕く、

「それから、こちらネ」と阪口の方を向いて云つた。「私の本當の兄さんにそつくりだわ」

「公平が保てないぞ」と阪口が云つた。

「あら、それは本當の話なのよ」と登喜子はそれでも少し顏を赤らめながら笑つて居た。

龍岡が大きな聲で、

「オイ。皆、賭けろく」と云つた。

眼の細い女中も仲間入をして、軍師拳の遊びをする時だつた。謙作は時々登喜子と手を握合はせねばならなかつた。

「今度はこれだ」こんな事を云つて、肩と肩とを附けて背後で暗號の指を握る。そして敵方の支度がおそかつたりすると、

「ちよいと、これでしたわネ」と登喜子は謙作の顔を覗き込むやうにして、同じ指を握返したりした。そんな時、他の人の場合では、感じない鋭敏さを以つて、其握方の強さを彼は計つた。そして此方から彼方を握る場合にも、同じ鋭敏さで握方が、それ以上、何の意味をも現はさないやうに注意した。彼は登喜子が多少でも意味のある握方をする事を恐れた。望みながら恐れた。これは矛盾だつた。然し、それが彼の神經で、又行爲の上の趣味でもあつた。其癖彼は猶且何かで登喜子の好意の證が見たかつた。

ニッケル渡の遊びをする爲めに、石紙で三人づつに分かれた。龍岡と阪口と女中、それから謙作と登喜子、豐といふ風に組んだ。

親になる人が眞中になつて、五錢の白銅を握つた拳を他の拳と重ねる。交る交る一方を上にして、仕舞に其白銅が何方の手にあるか分らなくした所で片々づつ兩側の子の握り拳に重ねる。そしてそれを移すとも移さぬとも見せて、最後に皆握つた兩手を膝の上へ置く。敵方は見てゐて、白銅のないと思ふ手から開けさして行つて、其空の手を餘計取つた程勝になる、さう云ふ遊びである。

今、まぶしい程の瓦斯の光の下に、謙作の組三人が竝んで行儀よく手を膝の上に出して居た。豐は子供らしいふつくらした小さい手を派手な友禪模樣の上に竝べて居た。登喜子は女としては、大きい方だが、形と皮膚の美しい手を矢張りさうして居る。黑い着物の上だけに一層それは美しく見えた。其間で一人、謙作だけが、折目もなくなつた着物の上に大きく節くれ立つた、その上黑い毛の澤山に生えた手を節の上だけが白くなる位堅く握締めて出して居た。

「ここには大丈夫ないネ」と龍岡が登喜子の手を指して阪口を顧みた。

「ここに渡つてるよ」かう云つて阪口は凝つと豐の顏を見た。豐は下眼使ひをして、默つて、その圓い頤を突き出した。

「彼方から、順に開けさして行かうか」と龍岡が云つた。阪口は氣合を入れて、

「その左。へえ、右」と續け樣に登喜子の兩方の手を開けさして、自身の指を二本折つた。そして、

「どうせ謙作にもないと思ふがネ」と、もう一度、組へ確かめて置いて、「へえ、其熊のやうな毛の生えた手を兩方」と云つた。豐は大きな聲を出して笑つた。謙作は默つて武骨な空の手を膝の上で開けた。そして不愉快を感じた。

彼は先刻軍師拳の遊びを始めた時から自分の武骨な手に拘泥つて居た。或る不調和な感じが、それに平氣にならう、ならうと思ひながら却々退かなかつた。それを今、阪口が露骨に指摘した。勿論彼は指摘された事でも不愉快を感じたが、それよりも、そんな事で自分に不愉快を與へようとした阪口の低級な底意に尙腹を立てた。

三時、四時になると戸外も靜まつて來た。雨も小降りになつて、地面を突きながら廻る鐵棒の響が冴えて聽えた。

阪口の眼は引込んで、はつきりと二タ皮になつて居た。彼は何かしら苛々しながら肉體からも精神からも來る凋殘な氣持に自身を浸し盡くして、却つてだらしなく絶えず饒舌つて居た。

夜が明け始めた。疲れと醉ひとで、龍岡も阪口も、もう其處へ寢ころんでうとくとして居た。豐は緣へ出て、秋らしい靜かな雨の中を歸つて行く人々をぼんやり眺めて居た。騷ぎに着崩れた彼女の着物は、裾擴がりの不樣な恰好になつて居た。瓦斯の光りが段々に間が抜けて來た。食殘された食物の器とか、袋なしに轉がつて居る卷煙草とか、トランプとか、碁石とか、それらの散らかつて居る座敷の樣子が、如何にも何か一段落ついたと云ふ感じを與へた。

謙作も疲れて居た。彼は前日の寢不足からも可成り疲れて居たが、何かしら腹の底では充奮して居た。そして一人「席取り」の遊びに使つた座蒲團を積み重ね上に腰掛けて居た。酒と塵埃で薄よごれた顏をしながら、こんなにしてゐる自分達が甚く醜く不愉快に感ぜられた。彼は一刻も早く此場面から自由になりたかつた。彼は自分の普段の氣分を根こそぎ何處かへ持つて行かれたやうな氣がし

本書需要完整PDF請訪問：www.ertongbook.com